

黒船に乗ってきた中国人¹⁾

ツー ティモシー ユンファイ*

The Chinese Who Came to Japan on the Black Ships

Timothy Y. TSU

要旨：中国人は黒船に乗って日本にやってきた。ペリー提督率いる日本遠征艦隊は複数の中国人を雇っていたし、ペリー来航の延長線上にあるハリス総領事の日本渡航にも中国人が同行していた。その後、中国人は続々と日本に渡航し、19世紀後半を通して来日中国人の数はほかのどの国をも凌いでいる。黒船がアメリカ人だけではなく中国人も乗せてきたことは、ペリーとハリスの対日外交工作が日本を近代的世界秩序に引き込んだことと並んで、近代中国人の世界的移動の潮流に日本を巻き込んだことを意味する。この論文では、「西洋対日本」の2項対立の図式から離れ、近代中国人越境者の視座からもう1つの日本の開国のストーリーを編み出すことを試みる。

Abstract :

It is common knowledge that Perry and Harris “opened” Japan in the 1850s, which in turn contributed to the downfall of the Tokugawa shogunate and the Meiji Restoration. However, it is seldom appreciated that Perry and Harris brought along Chinese on their missions to Japan. This paper offers a reinterpretation of the historical position of these mostly anonymous Chinese by arguing that they were not only collaborators for the American opening of Japan but were also forerunners of a modern trend of Chinese migration to Japan that continues to the present day.

キーワード：開国、ペリー来航、中国人移民、黒船、日中関係

1. 問題提起

19世紀中頃アメリカ海軍が徳川幕府に開国を迫った場面に中国人がいた事実について、東洋近代史家はことさら関心がないようである。おそらくその理由は、中国史研究者にとって日本の開国は日本史の範疇に属するものであり、研究対象外である。同様に、日本史の専門家にとっても、開国

は日米関係の視点からのみ捉えられ、中国人の存在は視野に入っていない。その上、開国と中国人との関わりについては、単なる事実確認にとどまる作業に過ぎず、注目されることがなかったと考えられる。現状として、中国人が開国・開港をきっかけに日本にやってきたことは周知の事実であり、これ以上深掘りする必要はないという認識が定着していると言えよう²⁾。しかしながら、ここ

*関西学院大学国際学部教授

- 1) 著者はこの論文の作成過程で三木まり氏と滋賀大学の福浦厚子教授からたくさんのご助言をいただいたことに感謝します。
- 2) 日本の開国にかかわった中国人の中に通訳としてペリー艦隊に加わった羅森だけがいくつかの研究の対象となっている。通訳としての彼の活動については Tao (2005)、生い立ちについては羅 (1971)、日本の習俗にかんする記述は程 (2012) を参照。しかし艦隊に雇われていたほかの中国人は歴史の地平線の向こうに消えてしまっている。

で新たに視座を変えることで、幕末に来日した中国人の活動の意義について違う文脈で改めて検討する余地があるのではないかと考える。

中国人は黒船に乗って日本にやってきた。ペリー提督率いる日本遠征艦隊は複数の中国人を雇っていたし、ペリー来日の延長線上にあるハリス総領事の日本渡航にも中国人が同行していた。開国を幕府に迫った2人のアメリカ人の下で中国人が働いていた。外交史、政治史、思想史、科学史など上層部の歴史の視点からすれば、西洋人の雇人として日本へ来た中国人は開国の歴史の背景、いや背景の中でも隅っこ、物陰にいる脇役に過ぎない。彼らは開国を促したり、そのあり方に決定的な影響を与えたりしたような歴史の英雄ではない。とはいえ開国の幕開けから中国人はアメリカ人および日本人と共に歴史の舞台に立っていたこと自体は、それなりの意義があるはずだ。彼らはアメリカの日本進出に便乗して近代日本に渡来した最初の中国人である。その後、中国人は続々と日本に渡航し、19世紀後半を通して来日中国人の数はほかのどの国をも凌いでいる。

黒船がアメリカ人だけではなく中国人も乗せてきたことは、ペリーとハリスの対日外交工作が日本を近代的な世界秩序に引き込んだことと並んで、近代中国人の世界的移動の潮流に日本を巻き込んだことを意味する。ここでは、「西洋対日本」の2項対立の図式から離れ、近代中国人越境者の視座からもう1つの日本の開国のストーリーを編み出すことを試みる³⁾。

2. 黒船祭

ニューポート市は、アメリカ東海岸ロードアイランド州の南東端にある歴史的な港町である。この町では2017年7月13日から17日にかけてBlack Ships Festival(黒船祭)を祝っていた。この年で34回目になるこの祭りは、例年通りニューポート市の日本姉妹都市である下田市が協賛している。主催側のホームページに掲載されているプログラムを見ると、祭り期間中様々な催事が企

画されている(Newport 2017)。日本総領事と地元政治家など主賓によるスピーチ、市民代表献花、アメリカ海兵隊の軍旗隊行進といった厳粛な行事から、和太鼓生演奏、書道や武道の実演、盆栽や風水クラス、日本酒カクテル試飲会、寿司ビュッフェ、市民パレード、日本海上自衛隊バンドの演奏、工芸品市など大勢の市民が気軽に楽しめるイベントが盛りだくさんだ。人口約2万5千人(2010年現在)のニューポート市は、歴史的にアメリカ海軍の重要な基地であり、今日もNaval Station Newportという6千人弱の軍人と民間人の雇員を抱える大規模な複合海軍施設が地元の経済を支えている(City of Newport 2018, Naval Station Newport 2018)。ニューポート市と黒船そして下田市との繋がりには、単にアメリカ海軍が日本の開国に深く関わっていたことだけに拠るものではない。この港町は開国を徳川幕府に迫った張本人、アメリカ海軍日本遠征隊司令官マシュー・カルブレイス・ペリー(Matthew Calbraith Perry, 1794~1858)提督の生誕の地であり、永眠の地でもある(Brown University Library 2019)。彼の等身大の銅像が今も町の中心に建っている。

他方、太平洋の反対側、日本の伊豆半島のほぼ最南端にある下田市(2010年現在、人口2万5千人)でも、ペリーは英雄として仰がれている(佐伯2014:13-54)。市中心部から南へ約1キロ離れた浜辺に近い場所に、ペリー艦隊来航記念碑がある。石塔となっている記念碑の上に提督の胸像が設置されており、塔のもとに鉄鎖につながれた重そうな黒塗りの錨が横たわっている。辺りは整然と整備清掃され、5月中旬の黒船祭の時に記念碑の前に献花も供えられている(駿河湾 NAVI 2017)。小さな公園になっているこの空間は、下田市の観光スポットとして市のサイトでも紹介されている。下田市がペリー来航とその結果としての下田開港・日本開国の歴史を大切に刻み伝え誇りとしていることが、この記念碑公園から見て取れる。

元を辿れば下田市こそがBlack Ships Festival

3) 開国の背景に中国があることを見落としてはいけないと加藤雄三氏が早くも1985の著書『黒船前後の世界』で力説している。氏は国際政治の文脈での中国の重要性に注目しているが、日本に渡った中国人を視野に入れない。

の発祥の地である（伊豆下田観光協会 2018、佐伯 2014：71-81、Rabson 2016）。始まりは戦前、1934年の第1回黒船祭まで遡る。ニューポート市の行事は、戦後の1958年に両市が姉妹都市協定を結んでから更に30年近くたった1984年に始まった。2017年の下田市の黒船祭は5月19日から21日までの3日間開催された⁴⁾。期間中、公式記念式典と米国水兵の墓前献花式の他、日米の国旗掲揚式、パレード、条約交換の歴史場面の再現劇、海上花火大会、港内クルーズ、生演奏会、開国市、着物ファッションショー、運動会などで町は賑わった。また、海上自衛隊の現役掃海艇と機関銃を載せた迷彩装甲車の一般公開も行われている。下田市の黒船祭の盛況ぶりはニューポート市のそれに勝ることがあっても、劣ることはない。

ところが一方で、ニューポート市と下田市が **Black Ships Festival**・黒船祭を通じて共同演出する日米親善友好の大合唱からは微細ながら不協和音も聞こえて来る。この不協和音の響きは、ペリー来航の歴史が日米両国間の関係からでは捉えきれない側面を持っていることを示唆している。その正体は他でもなく、ニューポート市の **Black Ships Festival** のホームページに掲載されている挿絵にある（Newport 2017）。そこには服装の異なる3人の人物が描かれている。ホームページでは挿絵の出典が記載されていないが調べてみると、これは U. S. Naval Academy Museum（アメリカ海軍大学校博物館）が所蔵する *Perry's First Landing in Japan*（ペリー提督の日本初上陸）と題する原画の細部であることが分かる⁵⁾。原画では総勢4名の人物が描かれており、2人ずつ画面の左右に分かれて向き合っている。中央にわずかな浜辺が見え、沖には大型の黒船と小さい日本の船が浮かんでいる。この構図からは、ペリーが幕府に持ちかけた開国の交渉がアメリカ側にとっても日本側にとっても、文字通りの水際作戦であった緊迫感がよく伝わってくる。

原画の中の画面の右側に立っている2人は服装と所持品から幕府の役人であることが分かる。彼らの視線の先にあるのは、対面する2人組のうちの1人、背が高く、黒い海軍制服を着用しているペリーである。ここで我々の興味を引くのは、ペリーのやや右後方に立ち、外見からアメリカ人でも日本人でもない4人目の人物である。この人物は日本の役人を見ているというよりはむしろペリーの方に顔を向け、彼の耳元に何かを囁いているように見える。服装から、そして何よりもその長い辮髪の外見から、清朝の中国人であることが分かる。立ち位置と姿勢から、この人物はペリーの通訳であろうかと思われる。この絵に描かれているシーンが実際にあったかどうかは後で言及するが、ここで問題にしたいのはこの絵が物語る歴史認識だ。これはペリー来航という日本とアメリカとの運命的な遭遇に中国人が介在していたことを明白に表現している。今日一般に語られている開国ストーリーでは中国人がペリーに随行していたことの意義についてはほとんど触れていないという現状を考えると、この絵の持つメッセージは新鮮かつ刺激的だ。

本題に入る前に、歴史背景として2点確認しておきたい。まずペリー艦隊には複数の中国人が同乗していたことである。正確な数字は分からないが、数十人はいたであろう。もう1点は、中国人がペリーとハリスと共に日本へ渡航したことは決して例外的な出来事ではなかったということである。当時、南中国沿海部で活躍する西洋人は中国人を雇い、様々な仕事に従事させる習慣があった。1846年に琉球に渡航したイギリス籍宣教師バーナード・ベッテルハイム（Bernard Bettelheim）は家族の他に中国人家僕も連れていたし、その2年前琉球を訪れたフランス人カトリック宣教師オーギュスタン・フォルカード（Théodore-Augustin Forcade）も中国人の助手を同行していた（西川 2016：26-27）。この2点を踏まえ、以下では史料を紹介しながらペリーとハリスが推進し

4) 祭りの描写は2017現在の伊豆下田観光協会のホームページにもとづいている（伊豆下田観光協会 2018）。

5) 当該博物館の Charles Swift への著者の問い合わせに対するメールメッセージ返信によると、この絵は尾形月山の作品で、日本の黒船協会が Rear Admiral Benton W. Decker に進呈した記念品である。所有者が1959年にこれを Naval Academy Museum に寄贈したという。

た日本開国プロジェクトにおいて中国人が担った役割を検討する。

3. ペリー艦隊の中国人

ペリー艦隊が日本より中国に長く滞留していた事実について、研究者の間ではほとんど問題視されていない。琉球を除けば、ペリーの滞日期間は2回合わせて約5ヶ月である(西川 2016: X)。これに対し広東、マカオ(ポルトガル領)、香港(イギリス領)、上海(国際貿易港・居留地)では合計7ヶ月あまり過ごしている。香港、マカオ、広東の間の海域はアメリカ東インド艦隊(East Indian Squadron)の根拠地である。日本遠征の指揮官であるペリーは、同時に東インド艦隊の司令官でもあったため、西洋に開かれた南中国沿岸部の貿易港と植民地は、当然ペリー艦隊の日本遠征の前線基地となった(後藤 2017: 91-92, 145-146、西川 2016: 15-19)。

ペリーの動向を時系列に要約すると、彼の計画の中に中国がどのような位置を占めているか見えてくる(西川 2016: 10-11)。1852年11月24日アメリカ東海岸の軍港ノーフォークを出発、大西洋を渡り、アフリカ、インド、東南アジアを経由し、1853年4月7日に香港に寄港した。まもなく広東に渡り3週間ほど滞在、今度はマカオ経由で上海に入り2週間ほど逗留してから5月23日に琉球へ向かっている(オフィス宮崎 2009 1: 303-337)。約1ヶ月半中国にいたことになる。だが日本へ直行したわけではなく、艦隊は琉球に回航し、1ヶ月ほど滞在した。その間、琉球王朝との条約交渉や琉球本島の調査、小笠原諸島の調査などを行なった(オフィス宮崎 2009 1: 340-511)。艦隊がようやく浦賀沖に現れたのは7月8日だった。ペリーは14日久里浜に上陸し、幕府が急遽用意した応接所でフィルモア大統領からの「日本国王」宛の友好と通商を求める親書とその他の書簡を幕府の代表に手渡した。その後ペリーは条約交渉には入らず、江戸湾の一部を巡航・測量して17日を以って日本を後にしている。第1回目の日本滞在は2週間にも満たなかった(オフィス宮崎 2009 1: 511-595)。

2度目の日本渡航までの約4ヶ月間、ペリーは

艦隊をマカオの北東にある、広東と香港とマカオのほぼ中間に位置する金星門という海域に停泊させた(オフィス宮崎 2009 2: 41-77)。ペリー自身はマカオで民家を借り、そこで助手と共に資料の整理に取りかかった。マカオに臨時海軍病院を設立し、病気になった隊員に陸地で休養する機会を与えた。このように1853年8月上旬から翌年1月下旬まで待機している。艦隊が横浜沖に再び現れたのは、1854年2月13日のことである(オフィス宮崎 2009 2: 118-259)。それから約1ヶ月半に渡る交渉の末、日米両国は3月31日をもって日米和親条約(ペリー条約)に調印した。それからペリーは下田と函館に赴き、この2つの港の港湾と町を調査した(オフィス宮崎 2009 2: 332-468)。その後再び下田に入り、6月8日から17日まで日米和親条約の細則に当たる下田条約を交渉し、調印した。ペリーは6月28日に日本を後にした(オフィス宮崎 2009 2: 468-488)。

未踏の地である日本へ出発する前、ペリーが艦隊を中国の水域に集結させたのは物資補給だけではなく、追加人員として中国人雇員を確保することも目的だった。艦隊に加わった中国人は、役割によって大きく3つのグループに分けられる。おそらく人数が一番多かったのは苦力(coolie)と呼ばれる単純労働者のグループである。数は定かではないが、複数いたことは間違いない。次のグループは中国人召使(史料では *servant*、*boy* あるいは *steward* と呼ばれている)である。彼らは各艦船に配属され給仕などの仕事に当てられていたが、何人かは各艦長に専属して働いていた。最後のグループは、艦隊の公式通訳であるサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ(Samuel Wells Williams)の助手として乗艦した3人の中国人である。中国語・英語の翻訳に従事するこの3人を専門性の高い雇員とすれば、召使は半熟練労働者で、苦力は単純労働者と位置付けられる。中国人は多様な役割を以ってペリー艦隊をサポートしていた。

苦力

艦隊の中国人苦力は水夫経験を持たない、単純労働力を随時提供する者である。彼らがどこまで英

語の指示を理解できたかははっきりしないが、アメリカ人士官たちの間では、働く意欲が見られず手際も悪いと評判は芳ばしくなかったようだ。遠征隊の公式報告書の第1回琉球訪問の部分に苦力たちの働きぶりを酷評する箇所がある。

1853年5月27日、艦隊が初めて那覇に入港した日の翌日、何人かの士官がボートを下ろし、港内を漕いで巡回することにした。すると間もなく予期せぬ困難に直面する。

乗組員はオールの使い方をまったく知らない中国人だった。したがって海が完全に穏やかでなかったら、この小旅行は失敗に終わったことだろう。やや苦労はしたものの、われわれは彼らに、うまく息を合わせて漕ぐようにさせ、どうにかこうにかボート用の水路と北の水路を分けている珊瑚礁に向かって進んだ（オフィス宮崎 2009 1：344）。

アメリカ人水兵ではなく、水夫経験のない中国人苦力にボートを漕がせた理由は定かでない。とにかく港湾内の海面が穏やかだったおかげでその場で漕ぎ方を指導し、幸いにして転覆の危機を逃れたという。

この出来事から3日後の5月30日、ペリーは琉球本島奥地の調査を命じた。12人編成の調査隊は那覇から上陸、島を横断してから北上、島の北端を回って戻ってくるという5日間の任務が与えられた。これに加わった士官と水兵はそれぞれ自分の武器と装備を携帯し、同行する4人の中国人苦力は1人15キロほどの荷物を運ぶことになった。ところが上陸して間もなく苦力たちが疲労を訴え始めた。調査隊は急遽琉球人を雇い、苦力としてチームに増員した。

隊員は各々武器のほかに雑嚢を持っていたが、約120ポンドの重い荷物は4人のクーリーに分けて持たせることにした〔中略〕しかしクーリーたちは、半マイル進むか進まないかの内に、荷物の重みで押しつぶされそうだと手まねで訴えた〔中略〕那覇の町の北のはずれで30分待つと、身体があいていた4人

の現地人が、竹ざおを持ってやってきて荷物を引き受け、中国人たちを助けてくれた（オフィス宮崎 2009 1：364-5）。

それでも中国人たちの働きぶりはいっこうに改善しない。2日目になっても、彼らは衰弱した様子のみであった。

中国人たちはみんな疲れはてていた、もしくはそのふりをしていた。というのは、その日、荷物を運んでいたのはほとんど琉球人のクーリーばかりだったからである〔中略〕役立たずで横着な中国人の面目は丸つぶれになった。そういう者たちを同行させたわれわれの方も無思慮だった（オフィス宮崎 2009 1：387）。

中国人苦力らはズルをして真面目に仕事に取り組もうとしていないのではないかと士官らは疑っていた。この嫌疑の是非はともかく、アメリカ人は連れてきた中国人苦力よりも現地で急遽雇用した琉球人の働きぶりを高く評価している。

調査の4日目、とりわけ蒸し暑い日だったようだ。そんな状況下でも琉球人苦力らはアメリカ人にペースを合わせついて行っていた。一方、中国人苦力らは歩調が遅く、チームから落脱しそうになった。

午後の蒸し暑さの中でも、琉球人のクーリーたちは重い荷物を担ぎ、遅れないように歩調を合わせた。一方、怠惰で不平ばかり言っている中国人たちは、のろのろとあとからついてきた（オフィス宮崎 2009 1：399）。

中国人苦力らは本隊について行けていないどころか、不平不満の言葉もこぼしていた。

最終日には、アシンという中国人がついに病气だと訴え、荷物を運ぶどころか、自力で歩くことすらできないほどに体調が悪くなっていた。仕方なく士官らは琉球の役人に簡易なカゴを調達させ、アシンを那覇まで運ぶよう手配した。その内、アシンは自力で歩けるところまで体力が回復

したため、歩いて町まで戻った。アシンが体調を壊した原因は酒の飲み過ぎと果物の食べ過ぎだったという。

珊瑚のかけらが散らばる湾内の海底を歩くことができた。2、3フィートの深さの水の中を、まっすぐに対岸へ進んだ。1時間半ほど進んだとき、アシンという中国人クーリーが身体の不調を訴えた。あとで分かったのだが、酒を飲み、青桃を食べたのが原因だった〔中略〕役人たちは粗末な轎を持ってくと、それで病人を那覇へ運ぶようにと勧めたが、それまでには病人の症状はかなり回復し、自分で歩けると言った（オフィス宮崎 2009 1: 401-2）。

中国人苦力らは本当に体力が劣っていたのか、それとも単に仕事をサボろうとしていたのか、あるいはその両方であったのかははっきりしないが、報告書を見る限り、アシンらは与えられた仕事を満足に遂行できない、質の低い労働者であったとされている。アメリカ人の目に映った中国人苦力は、体力のなさだけでなく、あらゆる面で役に立たないと思われていたようだ。次の一節がそれを表している。調査隊が上陸した1日目のことだった。

5時半には湾を見下ろす丘の1つに到着した。頂に松の若木に囲まれた開けた土地があったので、そこで野営することにした。木を切り倒すことは拒まれたため、クーリーたちが使っていた竹ざおを結び合わせてテントの支柱を作った。丘の斜面の下方に村があり、入り用なものを役人に伝えるのに多少手間取ったが、そこから鶏4羽、卵40個、薪2束を手に入れることができた。一行の中国人の1人、アシンは自分では琉球の言葉を話せると言っていたが、結局、ほかの技能と同じように、ろくに役に立たないことが分かった（オフィス宮崎 2009 1: 371）。

中国人苦力のアシンは琉球語が分かると言い張

ってアメリカ人と村人との取引の仲介に乗り出したものの、役に立たなかったという。そこで調査隊リーダーは、アシンは通訳ができないだけではなく他のことについても全く無能であるときき下ろした。これはアシン1人だけでなく、中国人苦力全員に対してアメリカ人が持っていたイメージだったようだ。

通訳官ウィリアムズも中国人苦力に関する記述を自分の日記に残している。5月30日、ペリーは奥地調査隊とは別にウィリアムズを琉球の首都である首里へ派遣し、条約交渉の間に事務処理に使う建物を入手するよう命じた。

上陸場所から約半マイル進むと、公会堂に着き〔中略〕ストックトンと私だけが同行の中国人3人と泊まり込む（洞 1970: 36-38）。

ウィリアムズに同行した中国人が苦力であるとははっきり書いていないが、少なくとも中の1人か2人は荷物を運搬する苦力だったことは想像できる。

首里と艦隊との間を行き来するウィリアムズは、中国人苦力に関して次のような観察も残している。6月1日のことだった。

ペリーが使う輿を運ぶため〔に〕出かけた。〔中略〕ボートへ引き返す途中、輿を運ぶ中国人の1人が道路脇の市場を覗こうと立ち止まったが〔中略〕わずかばかり並べられた貧弱な品物を軽蔑したまなざしで見回す彼の姿は、この小人国の寸法に比較して馬鹿でかいその背丈を呆れ顔で眺める婦人や住民たちの姿と比べて、あまり愉快なものではなかった（洞 1970: 40）。

このコメントから、中国人苦力がアメリカ人の批判的な視線を浴びつつも、自分たちも厳しい眼差しで周りを観察していたことが計り知れる。彼らの態度の良し悪しは別として、中国人苦力が自覚のない「物言わぬ動物」（次の節を参照）ではなく、自分の置かれた環境を批判的に見ることができると人間であることがこれで分かる。



図1 琉球に上陸しているペリー艦隊の中国人（画面の右端と中央）

Hawkes, 1856, *Narrative of the Expedition of an American Squadron ...* v.2, p.194 より
<https://archive.org/details/narrativeofexped0156perr/page/194>

ペリーは琉球王国の都である首里との往復の際、自分の地位の尊さを誇示するため輿に乗ることに固執していた。その籠を担ぐのは中国人苦力だった。

首里への往復には、これ [カゴ] に乗って艦から連れて来た8人の苦力に運ばせた。私に歩かせることは、非常に威厳を損なうことであったのであろう（金井1985:126）。

ちなみに苦力のほか、中国人召使もペリーの行列に加えていた（オフィス宮崎2009 1: 422）。

召使

艦隊は不特定多数の中国人召使も抱えていた。報告書は彼らの仕事の内容を説明していないが、関係箇所を総合すれば、艦長に付き身の回りの世話をするお抱えの者と、各艦船で給仕や雑用一般に従事する者と2種類あったことが分かる。

ペリー専属の中国人召使がいたことは、5月26日艦隊が那覇入港直後のある出来事で確認できる。

艦隊が投錨して2時間とたたないうちに、雨

にもかかわらず、2人の役人を乗せた小舟がやってきた。[中略] 彼らを迎えたとき、サスケハナ号にはひとりの通訳も乗っていなかったからである。そこで、代わりに提督が雇っていた中国人の召使が呼ばれた。この中国人は和紙に書かれた文字を読み、この来訪がチン・チン、つまり艦隊の到着を祝う挨拶に過ぎないことを理解するに足る説明をした（オフィス宮崎2009 1: 342）。

到着するやいなやペリーのお抱え中国人召使が臨時通訳として駆り出され、琉球当局が送ってきた書簡の解釈を任された。彼が正しく書簡の意味を理解し、それを伝えられたかどうかは別として、提督の身近に中国人召使がいたことはこれで確認できる。

次の史料からもペリー専属の中国人召使の存在が見て取れる。通訳ウィリアムズが第1回日本渡航の際に同行させたシェという中国語教師（teacher）が、航海中病気になってしまった。

[5月29日] 夕方、私はシェを旗艦へ連れて行き、ペリーの召使アチンに引き渡した。シェは彼の世話を受けることになるだろう（洞

1970 : 35)。

ウィリアムズは病気になったシェをペリー専属の中国人召使に託すが、病人はついに琉球で命を落としてしまう。この不運な人を最後まで見届けたのがアチンであった。

[6月9日] 艦に乗り組んでいる中国人のふるまいも実に不快なものだった。彼らは死にゆく同国人にいささかの同情も示さなかった。死ぬ前の一兩日、提督の召使のひとりを除けば、老人に近づくものはひとりもいなかった。臨終の夜、艦長は2人の乗組のクーリーに部屋に残っているよう命じた。彼らは命令には従ったが、病人からいちばん離れた部屋の隅に座り、一度も近づこうとしなかった。結局、病人に必要なものを与え、死に際に付き添っていたのは数名の操舵手だった(オフィス宮崎 2009 1 : 438)。

近代以前の中国人は死を極端に忌み嫌い、特に家族以外の人の死に立ち会うことは何としても避けようとする風習があった。中国人の中でアチンだけがシェの最期を責任持って見届けたのは、ペリーの厳命があったからであろう。

もう1つ、艦船の司令官全員にそれぞれ中国人召使が雇い入れられていたと思わせる資料がある。マセドニア号(Macedonian)の艦長のことである。日本との条約が成立した後、ペリーは艦隊を琉球に集めた。そこからマセドニア号は台湾に派遣された。任務は島の北端にある Keelung (鶏籠、のち基隆) 港の測量(Preble 1962 : 226-231)と台湾で難破して捕虜となったアメリカ人があるという風聞を調査することだった。

遭難し、捕らわれていると思われる同胞については、アボット大佐が自分の中国人従者[steward]⁶⁾を使って懸命に調査したが、なんの情報も得ることができなかった(オフィス宮崎 2009 2 : 521)。

中国人召使は臨時通訳者としてのみならず、現地での情報収集の任務も担っていた。

艦長に専属する者にせよ一般雑務に従事する者にせよ、中国人召使の食べ物への異常な関心はアメリカ人を驚かせたようだ。

艦隊の各艦船に雇われている中国人は常に、海軍の定額配分食料では自分たちの大食癖を満足させられなかった。[中略] 1卓10人で会食するアメリカ水兵はたいてい2人分の配分食料を辞退して、その分を金に代えて受け取っている。ところが中国人は、といってもいちばんさもしい連中のことだが、与えられた定量を食い尽くすだけでなく、甲板をうろついて給食の残飯を拾えるだけ拾い集め、いつも艦の料理人につきまとして炊事鍋の残りをせがむのである(オフィス宮崎 2009 2 : 45)。

これによると食欲旺盛なアメリカ人水兵より中国人の方が大食漢だったようだ。次の一節も同じことを伝えている。

提督の船室に雇われていた中国人の使用人たちは、米、パン、牛肉、豚肉、食卓の残り物など雑多なものを食べ、ほかの水兵の3倍は食べていた。実際、彼らが消費する米の量や、つかめるだけつかみとる食品の量の膨大さは、ほとんど信じがたいほどである。もし司厨が用心深く監視していなければ、砂糖や甘味食料の盗み食いは際限がなかっただろう。このような大食いは、物言わぬ動物と同じように、中国人の使用人にも影響を及ぼし、彼らはすぐに肥って、怠けるようになった(オフィス宮崎 2009 2 : 45-46)。

この引用文からペリーに専属する中国人の使用人が複数いたことが確認できる。

中国人がペリー艦隊に加わっていたことを示す

6) Prebleはこのstewardのことをthe captain's Chinese boyと呼んでいる(1962 : 76)。

視覚材料も残っている。報告書にアメリカ人隊員が那覇に上陸している時の光景を伝えるリトグラフがある。その中の1枚に2人の中国人が描かれている（図1、オフィス宮崎 2009 1：435）。画面の左前方に鉄砲を担いで歩くアメリカ兵が見える。兵士の反対側に井戸端があり、そこで洗濯している2人のうち1人は辮髪を垂らしている中国人である。そして画面の中央に三脚に乗せた写真機を操作しているアメリカ人がいる。彼のそばにも辮髪の中国人が立っている⁷⁾。この絵からは中国人がペリー艦隊の様々な活動に加わっていたことが窺える。

通訳の助手

遠征隊には公式通訳が2人いた。うち1人は広州で宣教活動をしていたアメリカ人ウエルズ・サミュエル・ウィリアムズである（Tao 2005）。彼は、日本語を習ったことはあるが忘れてしまったことを理由にペリーの誘いを一旦断るが、ペリーが堅持したため、最終的に乗艦した（洞 1970：19-20）。その際、彼は自分の中国語教師も同行させている。

[5月6日] 旅装はまったく整い、私の先生[シェのこと]も手荷物を下げて現れた。5月6日に、マカオ行の汽船でカントンを発ち、琉球に向けて出航するサラトガ号に乗り込んだ（洞 1970：20）。

シェはアヘンの常用者で、乗艦する時点ですでに衰弱状態にあったようだ。何日も続く慣れない船上生活に疲弊し、とうとう健康を崩してしまう。

[5月24日] 年老いたシェは船酔いがひどいようで、ほとんどベッドに横たわったまま、船揺れと狭い船室の監禁状態から次第に衰弱

していった。年が年だし、やる気がなく、そのうえ自分の体が衰弱してゆくのは、アヘンと煙草が禁止されているせいだとばかり思い込んでいた。その分では私の役に立ってもらえそうにないと心配になったが、那覇で上陸させれば、また元気を取り戻すことだろう（洞 1970：27）。

艦隊は5月26日夕方に那覇に到着した。その翌日ペリーは早くも琉球政府と条約交渉を開始した。そのまた翌日ウィリアムズはシェを上陸させ、7年前から琉球に住み始めたイギリス籍宣教師バンナード・ジャン・ベッテルハイムの家で休養させた（洞 1970：35）。一晩休ませた後、ウィリアムズはシェを旗艦へ連れ戻し、彼の世話を提督の中国人召使アチンに託した。シェはすでに極度に病弱していたにもかかわらず、ウィリアムズの仕事に尽力していたようだ。

[6月1日] ペリーの[琉球政府への]回答を中国語に訳し終えた後、老シェは誤って上陸してしまい、持ち前の間抜けさから陸に取り残され、現地人に頼んで彼を艦へ連れ戻してもらうのに難儀をした。シェはベッテルハイムの家へ行きかけたのではなかろうか。まだ体力も回復していないし、死ぬのではないかと心配である（洞 1970：40-41）。

シェの上陸は間抜けさのせいかも知れない。が、病気の上に船酔いに悩まされていた彼は自ら下船して休養したかったのではとも考えられる。この出来事から10日もたたないうちに彼は船上で息を引き取ってしまった。

[6月9日から13日まで] サスケハナ号に死者が出たのだ。ウィリアムズ氏は通訳として琉球で艦隊に加わるために中国からやってき

7) ウィリアムズによれば「木曜日[6月9日]の朝、ミシシッピー号とサプライ号を港に残し、サスケハナ号はサラトガ号を曳航して威風堂々と出港した。乗組員のうち数名は陸に残った。銀版写真家のブラウン氏と電信技師のドレイパー氏は残留組」だったという（洞 1970：60）。このリトグラフはこの残留組の活動を描いているのかも知れない。ブラウン氏は Eliphalet Brown Jr. のことで、写真家として遠征隊に参加していた（TOP Museum 2017）。

たとき、今後の活動に役立つのではないかと考え、かつて自分の師だった老中国人を連れてきた。しかし、この老人の余命が尽きようとしていることはすぐさま明らかになった。彼はアヘンの犠牲者だったのだ。老中国人はアヘン吸引の習慣をやめようとしていた。だが、その無理がたたり、さらにはサラトガ号上での船酔いも加わってすっかり弱ってしまった（オフィス宮崎 2009 1: 437-38）。

ペリーは日記（公式報告書ではない）の中でもシェのことに言及している。

[6月11日] けさ1時に、ウィリアムズ氏が通訳として雇った老中国人が息を引きとった。55才だといっていた。彼は教育のある人で、外国人、とりわけウィリアムズに中国語を教えるために雇われていた。その生涯の長い間、彼は阿片吸引常習者であって、全身は非常に弱体化し、その結果やせ細っていたため、本艦にやってきた時には、誰もが彼は長生きできまいと予言した。こうしてわれわれは中国語の通訳を持たぬ状態におかれた（金井 1985: 132）。

シェの死についてウィリアムズはもう少し詳しい記録を残している。

[6月11日] 哀れな老先生が今日、水葬に付された。サラトガ号で那覇に到着してからついに回復できなかったのである。旗艦では上等の部屋をあてがわれ、滋養食も与えられて、つくせるだけの看病が施されたが、とうとう気力も食欲も回復しなかった。彼は麻薬を持っていないと言い張っていたが、アヘン吸引道具を1式持ち込んでいたのだ。われわれはたえず吸わせまいと心掛けたが、彼は「保生丸」と呼ぶ朱色の丸薬を詰めて吸っており、その量はだんだん増えていたのである。次第に心身を蝕まれた彼が、私にくれた最後の仕事は、木曜日に財務官2人へ贈る絵2枚を選定したことである。その後は質

間にも答えることができないほどの精神状態になってしまった（洞 1970: 61）。

シェの不時の死はウィリアムズの仕事に支障を来たしたため、彼はすぐ上海から代わりの助手を呼び寄せた。

[6月28日] 今朝のカプリス号の入港〔那覇〕は、我が小艦隊に時ならぬ興奮を巻き起こした。〔中略〕私には、老シェに代わる中国人の助手と召使のアライが与えられた。彼らは2人共、上海訛りであった。この先生にはかなりの説明をしてやらなければならぬので、家に帰るまでに私は達者に宮廷訛りを喋れるようになるだろう（洞 1970: 81）。

新しい助手が来たものの予期せぬ問題が浮上る。

[6月30日] 私は大統領親書の翻訳で忙しかった。そして、私の助手の中国人が、知識に乏しくて、私の話す意味を呑み込むのに時間がかかるばかりの、ただの公認筆写生にすぎないことを知った。それに、彼の発音と私の発音とがかなり違っているために意味がとらえきれず、何度となく投げ出してしまった。彼は気だてが良く、気長であった。これには、私も学ぶところが多かった（洞 1970: 84-85）。

急遽上海から呼び寄せた助手は、代書人として読み書きができて、十分な教養がなかったようだ。その上、北京官話を話すウィリアムズは上海語を話す（あるいは上海訛りのひどい）この助手と意思疎通がうまく出来なかった。2人は悪戦苦闘を続け、アメリカ大統領が「日本国王」宛てた書簡の中国語訳を、何とか艦隊が日本に到着するまでに用意できた。

この大変な経験を教訓に、ウィリアムズは2回目の日本渡航に当たって、若くて健康でアヘンも吸わない羅森を助手に選んだ。羅はすぐウィリアムズに好印象を与えた。

[1854年4月11日] 博識な先生で、アヘン患者ではない羅がお供をしてくれることになった。お蔭で、前回よりはもっと勉強ができたそうだ（洞 1970: 142）。

ウィリアムズは仕事の関係上、羅を連れて一緒に行動することが多く、羅に対する印象も本人の日記に散見する。艦隊が那覇に停泊している間、2人は上陸してあちらこちらへ足を運んでいたようだ。

[1854年2月1日] 午後、先生と通りを散策し、彼が今まで見ていない、いろいろな場所へ足を向けた。その1つがベッテルハイムの家の近くにある墓地であった（洞 1970: 156）。

ウィリアムズは羅の琉球の風俗に対する好奇心にも言及している。

[1854年1月24日] 私の先生は、乞食同然の身形や顔つき、半裸体で歩き回るやり方、それでいながら食料を売り惜しむ、この人たちを見て、非常におもしろがっていた（洞 1970: 149）。

ウィリアムズはなぜ2度の渡日どちらにも中国人の助手を同行させたのだろう。どうやら彼の中国語能力は話せても、満足に書くことはできなかったようだ。ペリー日記の中に次のコメントがある。

[1853年6月11日] ウィリアムズ氏は英語の意味を北京官話にして伝えることができ、またこうして口述することもできるが、北京官話を書くことはできないからである（金井 1985: 132）。

ウィリアムズが漢字を全く書けないわけではなからう。ペリーが指摘しているのは、彼が中国語の

文章（漢文）を筆で外交文書のあるべき体裁に従って綺麗に清書することができない点であろう。だとすればウィリアムズは次のようなステップを踏んで通訳の仕事をこなしていたのではないか。まずアメリカ側の意図を彼が北京語に訳して中国人の助手に説明し、それから2人は中国語の翻訳の文面を推敲する。それが決まれば、今度は中国人の助手が筆と墨で綺麗に清書する。出来上がったものをアメリカ側の公式文書として日本側に渡すという流れだったのであろう。

幕府の代表との交渉におけるウィリアムズの役割は、双方の口頭のやり取りを通訳することではなく、中国語文書の作成にあった。ペリー日記によると横浜での日米の対面交渉は次のように行われていた⁸⁾。

林〔復斎〕と私〔ペリー〕の間には、森山栄之助が膝まずいていた。そしてすべての意思の伝達は彼を通して行われた。まず、初めに私がポートマン氏に英語で話し、彼は同じことを森山にオランダ語で伝えた。すると森山は首席理事官に向けてそれを日本語に翻訳したのである。返事はすべてこれと同じ方法で私に伝えられた。私の書面による通信は、英語、オランダ語及び中国語で提出され、そして返答もすべて日本語、オランダ語及び中国語で私のところに来た（金井 1985: 360）。

この引用文は日米交渉の中でのコミュニケーションの手段とプロセスを的確に説明している。基本的に日米の代表が面会する時にオランダ語を通じて口頭で交渉を進めていた。ペリーのオランダ語通訳は彼が上海で雇ったアントン・L・C・ポートマン（Anton L. C. Portman）であり、林大学頭の通訳は森山栄之助であった。もう1つのポイントは、中国語の役割である。長い交渉の過程の中で書面でのやり取りも多かった。その場合、双方は自国の言葉で書かれた原本と共に、オランダ語訳文と中国語訳文も添付して、合わせて3通を提出するのがルールだった。例えば3月31日の

8) ペリーと幕府の交渉の中での中国語の位置づけと羅森の役割について、Tao (2005) を参照。

条約交換の日にアメリカ側は英語、オランダ語、中国語で書かれた条約3通を日本側に手渡し、これに対して日本側は日本語、オランダ語、中国語で書かれた条約3通をアメリカ側に渡した。日米交渉の全過程では、オランダ語は話し言葉と書き言葉として使われていたのに対し、中国語は書き言葉としてのみ使われていた。したがってウィリアムズの仕事の内容は、主に中国人の助手と2人で中国語の翻訳文を作成することだった。

ウィリアムズの通訳としての任務は、6月17日に調印された日米和親条約の細目を決めた下田条約によってほぼ終了した。そのわけは下田条約の第7条にある。

今後、両政府の公式告示において中国語を用いないこととする。ただし、オランダ語通訳のいない場合はその限りでない（オフィス宮崎 2009 2: 473）。

この合意によってオランダ語は日米外交の共通語として最優先され、中国語はやむを得ない時のみ使う言語と位置づけられた。これを反映して、同条約の最後に次のような文言が付け加えられている。

以上を証明するため、英語および日本語による本付加条項〔下田条約のこと〕の謄本に両当事者は署名捺印し、かつオランダ語に翻訳し、米日両国委員がこれを交換するものである（オフィス宮崎 2009 2: 474）。

日米和親条約の交換の時とは異なり、下田条約の場合は中国語版が省かれた。

4. 目撃証言を残した中国人

ペリーの条約交渉と締結の現場にいた中国人羅森は一体どんな人物だったのであろう。彼はペリー艦隊に雇い入れられた者の中で唯一人、その証言を歴史に留めた中国人である。羅は帰国後、琉球と日本に関する見聞記を発表している。中国語版「日本日記」は香港の『遐邇貫珍』という雑誌で1854年11月に発表された（羅 2008）。それよ

り先の9月に英語版 *Journal of a Visit to Japan* が同じ香港発行の季刊誌 *Overland Current and Price Register* で活字になった（Tao 2005: 98）。この英語版がのちペリーの希望で遠征隊の報告書に付録として収められた（Williams 1889: 230-31）。ここでは羅の名前は伏せられ、著者は「ある中国人」（a native of China）となっている（A Native of China 1856）。

不明な部分の多い羅の生い立ちは先行研究に委ねることにする（羅 1971）。ここでは「日本日記」に見られる羅と日本人との関わりに焦点を絞りたい。日記は著者の日本での任務にはまったく触れておらず、旅行感想記といった内容である。羅と日本人との接触に関する記述は、日米両国の外交交渉にのみ注目する標準的な開国のストーリーを補足する意義がある。

羅は仕事の性質上、アメリカ人、特にウィリアムズと行動を共にする機会が多かったようだが、ペリーの随員に加わることもあった。例えば琉球ではペリーの行列に加わり、輿に乗って琉球王府の宴会に赴いた。

正月初六、提督被理、衛廉士等一班將官、佈列威嚴、與予乘轎至王宮〔中略〕享宴甚豐〔後略〕（羅 2008: 33）。

末席ではあったろうが、公の宴会の場に参加できた中国人はおそらく彼1人であったと思われる。

羅はペリーの2度目の日本上陸にも随行していたと思われる記述を残している。

提督被理、佈列威嚴、上岸相會。衛廉士為通理國師、呈以通好條約〔中略〕款待不過鮮魚、蠔蜆、雞蛋、蘿蔔、黃酒而已（羅 2008: 34）。

ペリーが受けた接待の内容を具体的に描写できるのは現場に居合わせたからであろう。

似たような目撃証言は他にもある。条約調印後、艦隊は調査のため下田湾へ回った。ペリーは下田で上陸して了仙寺に一時滞在していた。羅も

同行していたような内容を記録している。

次日、提督上岸、館於法順山了仙寺。其寺有僧、名日淨、小徒2名。内有佛殿。殿旁墳所、各家信士信女之墓也。墓以石為墳塔、僧人時時掃除、供奉名花。寺陵有石亭、小魚池、花果等類。是日在此烹茶、男女千百人入寺觀看（羅 2008 : 39）。

了仙寺境内について、また当日の盛況について、詳細に描写していることから、羅はここにも居合わせたのではないと思われる。

艦隊が函館停泊中、羅はアメリカ人に随行し松前藩の大老松前勘解由に接見、大老の屋敷を見学している。勘解由は函館にきたペリー艦隊に対応する任務を負う重要な人物であった。

松前大夫勘解由之公館、幽雅潔淨、貼近海濱 [中略] 予同辨地、衛廉士等入而晤之、款接甚恭、人品醇善（羅 2008 : 44）。

この記述では、ペリーはその場にいなかったようだが、羅はアメリカ人チームの一員として藩の上層部に接していたことが分かる。

アメリカ人に付き従って鎖国日本にやってきた羅は、漢文を通じて数多くの日本人と交流していた。交流の手段は書画だったり、詩の応酬だったり、書籍の贈答だったり、時には政治談義も行われていた。羅によると日本人が彼に一番求めていたのは書と画であった。

予或到 [横濱] 公館、毎多人請予録扇。一月之間、從其所請、不下五百餘柄（羅 2008 : 38）。

下田では彼が書いた扇子の量が更に倍増したという。

予于下田、一月之間、所寫其扇不下千餘柄矣（羅 2008 : 42）。

また何人かの幕府の役人に自分が題字した扇子を贈答している。

黒川嘉兵衛是主理下田事務之官、堀達之助、森山栄之助、中台信太郎等是行事之官、共以扇請書（羅 2008 : 42）。

そして函館では、平山謙二郎から扇子を、遠藤又左衛門から絵を、松前藩大老から書籍を贈られている。

謙二郎以唐詩録扇贈予 [中略] 遠藤贈予畫二幅 [中略] 大夫贈書數卷（羅 2008 : 44-45）。

ウィリアムズ日記も羅の人気ぶりに触れている。

[4月6日] 8時半ごろ、今朝の主人が、扇子1本と紙十数枚を携えてパウアタン号を訪れ、私の先生に一筆したためてほしいという（洞 1970 : 265）。

この日ペリーとウィリアムズを含む一行は下田に上陸して散歩していた。途中、ある村長の家で休憩を取り、お菓子とお酒の接待を受けた。その夕方村長は羅の乗っている船に現れ、彼の書を求めて来た。ウィリアムズは彼が羅に題字を願うのは口実で、真の目的は外国の戦艦を見学することにあると思ったようだ。いずれにせよ書と画が羅と日本人を繋ぐ1つの契機となった⁹⁾。

ウィリアムズの3月11日付けの妻宛の書簡の中にも、羅の活躍ぶりが報告されている。

彼は素晴らしい人である。日本人の扇子に詩を書くことで彼は日本人と友達になった。多くの日本人は中国語を読み書きできるが、話せる人は1人もいない。羅と彼らは紙の上でコミュニケーションする。私たちは忙しくて、時間が早くかつ楽しく過ぎていく（Williams 1889 : 212）。

9) 羅が函館で書いた扇子について、鳴海（2009）を参照。

函館滞在中ウィリアムズは5月21日付の妻への手紙に再び羅のことに言及している。

首都〔江戸〕からの使者とオランダ語通訳がまだ到着していないため、通訳の責任が全部私にかかってしまうようになった。〔中略〕今まで私が話す〔talking〕ことはほとんど重要なことではなかったのに、過ちがあっても大した影響はなかったわけ。しかし今の事態は大変だ。だから私は大いに羅に頼り、もう1つの言語の力で、できるだけ過ちを避けようとしている。彼は私たちの仕事の全般に興味を示し、日本人とも仲良くしている。彼はこれらの日本人が今まで会った中国人の中で一番教養のある人だった。彼らは喜んで羅に自分の中国語の造詣を披露し、羅から題字のある扇子を貰うと大変喜ぶ。彼は日本に来て以来5百以上の扇子に題字を書いたと思う。彼もまた題字の依頼をたいそう喜んでいる(Williams 1889: 218-19)。

羅と日本人との頻繁な接触は、本人による誇張ではなく、事実であったことがウィリアムズの証言で分かる。

日本側からの証言もある。下田に居合わせたある侍は手紙の中で羅についてこう書いた。

清朝人も乗組居り、其内壺人、羅森と申もの日々上陸いたし、小間ものやに出会之節、扇子など出し望候得は即吟之詩作等相認候よし。数本見受候処、手跡も立派の事に御座候(史料編纂所 1972 6: 619-20)。

羅は日本人と詩の応酬もしていた。その中で、政治と宗教についても触れている。横浜では、平山謙二郎という役人に『南京紀事』と『治安策』という2冊の本を貸した。

有平山謙二郎〔中略〕趨而問予中國治亂之端。予將平日紀錄之事及「治安策」視之(羅

2008: 38-39, 44-45)。

のちに平山は本を返却する際、独自の鎖国論を羅に開陳する書簡を添付している(羅 2008: 35-36)。また、以下のような偶然な出会いもあった。

是日游山〔中略〕適遇菊地森之助、談、問亞國所遵何教(羅 2008: 41)。

郊外での偶然な出会いであったからこそ、キリスト教という政治的に敏感な話題にも言及できたのかも知れない。別の場では日本人の役人に日本の官吏登用制度について質問している。

合原操藏、是浦賀府之官。予問其國取士之方(羅 2008: 37)。

反対に日本人も羅に同じ質問をしていた。

大醫文荃問余中國取士之方(羅 2008: 45)。

中国の知識人としての羅は支配階級である日本の武士と同じように、国家の人材登用の方法について共通した関心を持っていた。

最後に触れておきたいのは、羅が日本の物産品と物価に強い関心を寄せていたことだ。かつて商売していた経験のある羅は、下田でも箱田でも街へ赴き、商品と価格を熱心に聞き取っている。サンフランシスコ市にある Asian Art Museum (アジア美術館) は、The Black Ship Scroll (黒船絵巻) と題する作者不明の掛け軸のシリーズを所蔵している。その中の1枚に羅を描いているものがある。この絵の画面の上方と下方に以下のような書き込みがある。

広東ハ産羅森ト云者、アメリカ船へ同船シテ来ル。此者船中ニ在リテ文書通理スル役、又唐通詞役ヲモ勤ムト云。此図ハ下田町ヲ徘徊シテ物ノ価ヲ問ヒ、其高下ヲ論ジテ買調フルノ図¹⁰⁾。

10) <http://searchcollection.asianart.org/view/objects/asitem/objecttype@Hanging%20scroll/461?t:state=flow=89b468bb-c1a3-4144-9321-0a0fd9b89ba2>, accessed Feb 5, 2018.

羅は海外市場の調査に熱心だっただけではな
い。ポーハタン号が中国の寧波に着くや否や、す
ぐに商売を始めている。

予同衛廉士在“鮑了丹”火船，往浙江寧波。
船泊於虎靖山外。予上鎮海，入縣城，用四工
錢買絲，價略低於粵省（羅 2008：46）。

寧波と広東の絹の価格に開きがあると読んで、
寧波で安く商品を仕入れて、広東でそれを高く売
るつもり算段だったようだ。また、羅が日本から
持ち帰った昆布は、後日香港の商人が函館まで赴
き海産物の輸出を試みるきっかけとなった（羅
1971）。彼は古典の教養を生かしてアメリカ人に
仕え、文化人として広く日本人と交流し、そして
商人としての感性を常に持ち合わせており、環境
に機敏に反応できる人物だったといえよう。

ペリー来航の部分の結びとして、冒頭に触れた
Perry's First Landing in Japan という絵画の史実
性について少し検討してみよう。結論を先に言え
ば、この絵は実際にあった場面を描いているとは
考えられない。これは日米交渉における中国語の
役割を考えれば推定できる。すでに説明したよう
に日米対面交渉で使われていた口頭語はオランダ
語であり、中国語は書き言葉としてしか使用され
ていなかった。画中のシーンのように、中国人の
通訳が日本の役人の言葉を英語に訳して口頭でペ
リーに伝えるような場面はあり得ない。この役割
はオランダ語通訳であるポートマンが果たして
いたはずだ。仮に何らかの理由でポートマンがそ
の場にいなかったにしても、ペリーに通訳するの
はウィリアムズになるはずである。だからといっ
て、この絵にまったく史学的な価値がないとはい
えない。なぜならこの架空のシーンは、忘れられ
た開国の歴史の一側面を蘇らせてくれているから
だ。

5. ハリスの中国人家僕

初代駐日アメリカ総領事タウンセンド・ハリス

（1804～1878）は、ニューヨーク市の北 200 キロ
離れたサンディヒル（Sandy Hill）という村に生
まれ、少年時代から中年までニューヨーク市で暮
らした（坂田 1997 1：7-16）。家業の關係で商売
の経験が長かったが、市政にも加わっていた。45
歳（1849 年）の年、東洋へ渡り貿易に従事する
が、大した成功を納めるには至らなかった。東南
アジアと南中国の貿易港を転々としているうち、
ペリーが開いた日本へ行くことを決意する。精力
的な根回しの甲斐あって、1855 年念願の日本総
領事の任命が決まった。1855 年 10 月 17 日ニュ
ーヨークを出発するが、最初の任務はシャム政府
と新しい条約を結ぶことだった。それを終えてか
ら、ペナン経由で香港に入り、日本への渡航準備
を整えた。しかし乗船予定の船艦の整備と修理の
ため出航が大幅に遅れ、ようやく下田に入港した
のは 1856 年 8 月 21 日のことだった。紆余曲折の
交渉の末、1858 年 7 月 29 日にやっと幕府と下田
条約を調印することに成功した（坂田 1997 1：
16-20, Library of Congress 2019）。

条約交渉の間、下田でのハリスの暮らしは容易
ではなかった。幕府は彼の渡来を歓迎しておら
ず、条約の交渉がなかなか進捗しない時期があっ
た。その上、行動の自由は制限され、欲しい食料
はうまく調達できず、日本語もまったく理解でき
ない。孤独なハリスと共に逆境を耐えていたのは
来日当時 24 才のオランダ語通訳ヘンリー・ヒュ
ースケン（Henry Heusken）と 5 人の中国人家僕
だった。移民史の観点から見れば、ペリー条約に
基づいて最初に日本やって来て滞在できたのは 2
人のアメリカ人と 5 人の中国人だった。国籍比で
言えば 2 対 5 だ¹¹⁾。

中国人家僕はハリスが香港で雇い入れた。アジ
アで貿易をしていたハリスは、常々自分の財務状
況に気を配っていた。彼の日記に次の記載があ
る。

[1856 年 7 月 5 日] 2 人分、月 16 弗で、1 人
の料理人と、その助手とを雇い、月、各々

11) 1855 年 3 月 15 日カロライン・フート号が 6 人のアメリカ人商人を乗せて下田に入港したが、一行は長期滞
在と商業活動が許されなかったため、退去を余儀なくされた（山本 2017）。

14 弗で、裁縫師と洗濯夫とを雇った。艦上と、それに下田へ到着した後、私は彼らに食事をあたえることになっている。又1年後、もし彼らがそれ以上滞留することを欲しないならば、私は彼らに香港までの船賃を与えるはずである（坂田 1953 1: 263）。

これによると中国人の雇用条件には、賃金のほか契約期間中の食事と宿泊、および日本往復の出費（復路の旅費は条件付き）が含まれている。これが高額な条件であったかどうかは分からないが、下田に渡ってからハリスはこの人件費が非常に気になっていたことは確かである。

この4人の家僕を束ねる役として、ハリスはアサムと言う召使頭を雇った。アサムの採用に関してハリス日記にはこう書いてある。

[1856年7月8日] 1ヶ月15弗で、召使頭、すなわちボーイ長を雇う——しかし、彼は前渡金に対する保証人を得ることができないので、行けないのではないかと懸念する（坂田 1953 1: 267）。

保証人の問題はすぐ解決した。同日の記載では、アサムとの雇用契約が成立し、当時の慣習に沿って賃金の一部も前貸ししている。

[1856年7月8日] 今朝、召使頭のアサムが保証手続を完了したので、私は彼に3ヶ月の賃銀、すなわち45弗を前渡しした（坂田 1953 1: 267）。

約1ヶ月後、台風が襲った。香港とマカオ一帯は浸水と家屋倒壊の被害が酷く、アサムの家も壊れてしまう。

[1856年8月2日] 私の召使頭に5弗を貸し、彼の家が[強風と豪雨で]倒壊したので、2日間の暇をあたえて、家族の世話をするために彼の村へやった（坂田 1953 1: 278）。

こうしてハリスはアサムを召使頭として確保し、彼を日本へ連れて行くことができた。下田に入ってからアサムの働きぶりに不満の言葉をこぼしたことはない。

一方でハリスが雇った裁縫師は当初から難しかった。彼は完全に博打に溺れており、仕事に対する責任感は微塵もなかったようだ。

[1856年8月6日、マカオ] 私の裁縫師は、賭博すっかり金をなくし、今厚かましくも、1ヶ月分の賃銀をくれという。私はすでに3ヶ月分を彼に前貸ししているの、これを拒否した。その後、かれは召使頭を通じて、金をなくしたばかりでなく衣類全部と毛布までも入質したことを私に知らせ、それらを請戻すために、5弗くれと頼んだ。しかし私は、それらを明日質からだし、彼が再び艦に来るまで、それらの品物をしまっておいてやろうと思う（坂田 1953 1: 280）。

そもそもこの裁縫師はハリスのところで働く意志があったかどうかとも疑わしい。何故なら彼は出航まで失踪と逃走を繰り返していた。

[1856年8月8日、香港] 私の裁縫師が失踪した—賭博場やその他のいかがわしい場所全部へ人を派遣したが、発見されない（坂田 1953 1: 282）。

[1856年8月10日、香港] 前渡しした42弗のことについて、裁縫師の保証人を訪ねた—すると、彼は出かけて行って、20分たたないうちに裁縫師の手足をしばって、私のところへ連れてきた。私は裁縫師を艦へ送らせるように命じ、またベル艦長に手紙を書いて、裁縫師を受けとり、私の許可なしには艦を出ることを許さぬようにと依頼した（坂田 1953 1: 283）。

[1856年8月11日] 裁縫師は、昨日艦へやってこなかった。再び同人を探して、とうとう艦にのりこませた。マカオで不在にしたた

め3弗の罰金を課すこと、香港でも同じことをしたので一弗を課すこと（坂田 1953 1: 284）。

ハリスは裁縫師の保証人に圧力をかける他、アメリカ海軍の力を借りて、まるで誘拐するかのようには日本行きの軍艦に連れこんだ。けれども下田に着いてからもいっこうに行いを改めることなく、ハリスの甘い言葉にも脅しにも動かされることはなかった。

[1856年9月6日、下田] 私の裁縫人は無頼漢であることが分かる。彼は働こうとはしないし、いくら賃金を下げられても平気だと放言する。こんなに賃金に無頓着な中国人というものを、私は今まで見たことがない。私は彼に嚴重な訓戒をあたえた。私は彼に、もし食べてゆこうと思うなら、働かなければならぬ、私はお前を牢に入れたり、うんと減食させたり、また毎日鞭打を加えさせたりする権能を持っている、仕事をして、賃銀とよい食事を取る方がよいか—または牢に入って空腹と鞭打の懲罰をうけた方がよいか。月曜日までによく考えておくがよいといった（坂田 1953 2: 55）。

日本に渡って3ヶ月ばかり経たころ、ハリスはどうとうこの裁縫師のことを諦め下田来訪中のロシア軍艦に託して帰国させている。裁縫師はアメリカ総領事によって日本から強制送還された中国人第1号となった。

[1856年12月11日、下田] 私の裁縫師をロシアのコルヴェット艦に乗りこませる。彼は厚かましくも、人物証明をよく書いてくれと、私にたのむ！ 中国人の道徳的節操の缺如を、一体誰が測ることを望み得ようか（坂田 1953 2: 139-140）。

残りの4人の中国人の日本滞在はどうだったのだろう。彼らの生活も決して楽なものではなかったようだ。幕末日本はハリスを始め外国人を喜ん

で受け入れる時代ではなかった。幕府はハリスの到来と滞在を歓迎しない上、彼が提示する通商条約にも強い警戒心と拒絶反応を示していた。この延長線上で、ハリスと交渉する役人も中国人家僕に接する一般の日本人も、消極的な態度を示し、時には敵意さえ見せていたようである。

[1856年9月14日] 中国人の召使の中で、散歩に出かけた者があった。彼らは3人の警吏に尾行された。彼らは果物を買いたいといったが、拒否された。そして最後に、井戸端にいた1人の男に1杯の水を所望したところ、男は阻み、水呑茶碗を持ったまま逃げ去ってしまった（坂田 1953 2: 67）。

ハリスはこの事件を取り上げ役人に抗議したところ、以後同様の事態が起きないように配慮するとの約束を交わす。だが、次の記録が示すように、条約交渉が思い通りに進まないどころか、毎日の生活そのものがハリスと中国人家僕にとって執拗な交渉の連続だった。果物でさえ入手するのは簡単ではなかったようだ。

[1856年9月15日] 今日は、見事な、よく熟した葡萄と柿とを若干入手した [中略] [役人たちは] これまで私に対して、このような果物が当地に産することを否定してきた。それなのに、それらを私のところへ持ってきたのは、私の料理人が日曜日にそれを街で見つけ [たものだった]（坂田 1953 2: 69）。

そもそも日本とは食文化が異なる故、ハリス一行は下田で野菜を植えたり豚を飼ったりしていた。牝豚は中国から連れて来たものだろうが、飼育に携わったのは中国人料理人とその人の助手であろう。

[1857年9月30日] 私の健康は、ひじょうに良くなっている。これは食餌の改善のおかげであると思う。私は今、美味な中国の豚肉を十分に摂っているから。私の飼養している牝豚は、この8月の5日に13匹の子供をう

んだ（坂田 1953 2: 311）。

ハリスは自分のところの中国人洗濯夫についても言及している。彼によると当時下田では洋服を洗濯してアイロンできる日本人はいなかった。ある時、彼は懇意になった下田停泊中のロシア艦艦長に自分の中国人家僕に洗濯させることを提案している。

[1856年11月12日] 午後4時を少し過ぎて、コルヴェット艦 [ロシア] へいった。[……] 私は2名の大佐に対し、日本人はリンネルの洗濯法を知らないから、もし陸まで送ってよこすなら、私の洗濯夫に貴官らのそれを洗わせようといった。私はまた、士官たち全部に対してそれと同様のことをしてあげられないのが残念である、私の洗濯夫は助手を持っていないからと告げた（坂田 1953 2: 111）。

ハリスが洗濯のサービスを提供すると言い出したのは、ロシア艦の艦長が自分に馳走したり便宜を図ったりしてくれたことに対する返礼だった。

一方で、ハリスが始終気懸りだったのは中国人家僕のコストであった。下田に住み始めて8ヶ月経った時点で、財務状況を見直している。その結果人件費が一番の支出であることに気づく。

[1857年4月14日] 私の召使は、当地における私の費用の中で最も重い費目となっている。彼らの賃銀は1年700弗以上になるから。それは4人分である。私はこの外に彼らに食物と部屋とをあたえている。その一方、5名の日本人に対する支払は年132弗である、しかも彼らは食事を自分で賄っている（坂田 1953 2: 223）。

単純に賃金だけを見ても、中国人4人を雇うためには日本人5人を雇うより5倍以上かかっていた。その上、中国人には食事および宿泊費用も提供しなければならない。

[1857年4月18日] 私の召使は、召使頭、料理人とその助手、洗濯夫、少年の僕2人、水運搬人、掃除夫、園丁、馬丁—都合10名であるが、その1人も缺くことのできぬ者たちである（坂田 1953 2: 227）。

出費はかさむが、ハリスは使用人の数を減らそうとは考えなかったようだ。

中国人家僕は不可欠な要員である一方、悩みの種でもあった。下田に着いて半年もしないうちに、料理人と裁縫師がアヘン買い占め事件を引き起こした。

[1856年11月24日] 御用所の人々がやってきて、次のことを知らせた。私の料理人と裁縫師が昨日下田の薬屋へ行って、阿片がないかと聞いた。そして、無いとの返事であったが、押匣に漢字で書いてあるのを発見するや、私の名前を笠にきて、威嚇しながらそれを要求した。彼らは2軒の店で見つけた阿片を全部に買って持ち帰ったが、それは下田にある阿片の全部であった。役人たちは、阿片はただ薬用に使用されるだけであると述べ、2人がそれを全部もっていったのは不都合であり、殊にそれは薬用の目的で必要とされたのではないと訴えた。彼らは丁寧な態度で私に、中国人に対しその大部分を返却するように命じてはくれまいかと頼んだ。私は、中国人から全部取り上げるように命じた。ヒュースケン君は裁縫師から6オンスほどの塊を取り上げた。料理人の方は、中国流に精製して吸煙に適するようにするため、自分のものを水に溶かしてしまっていた。そして、それを渡すのを阻んだ。私は自ら彼のところへいった。彼は非常に渋い顔をしていたが、暫くして、少量の沈殿物と水の入っている1つの皿を持ってきた。私は、それを濾過することを強要した。そして彼に対し、牢獄の方がよいか、その薬を引き渡す方がよいか、そのいずれをえらぶかということ、彼はようやくそれを手放した。塊は日本人に返されたが、溶液の方はどうにもならないと日本人がいうので、

それを棄ててしまった。私は役人たちに向かって、私の家人に対し阿片、酒、その外どんな種類の興奮飲料をも売らないように商人たちに命じてくれと頼んだ（坂田 1953 2: 123-24）。

今ではちょっと滑稽にも見えるこのエピソードは幕末において日本人と外国人との交渉がいかに誤解と軋轢に満ちていたかを物語っている。ここで注目したいことは日本の役人がアヘンの所持と使用を問題視していたわけではなく、買い占めがいけないと追及していたことだ。ハリスが中国人にアヘンを一切売らないよう日本側に要求したことはいささか過剰反応に映る。

中国人家僕はしばしばトラブルメーカーであっただけでなく、外交上の仕事の邪魔にもなりかねないとハリスは認識していた。彼のこの考えは最初の江戸入りの際に端的に現れている。1857年の秋、徳川将軍に謁見することが決定する。これは通商条約交渉の成敗が全てかかる、重要な突破口であると認識していた。慎重に旅の準備を進めるハリスは、中国人家僕について1つの決断を下す。

[1857年9月28日] 私は、私の使っている中国人を1人も[江戸へ]連れていかぬだろう。なんとすれば、日本人は中国人を大変嫌っているし、私としても、日本人の脳裏に中国人、あるいは他の国人の連想を呼びおこすことを好まないから。それ故、私はヒュースケン君と2名の日本人の家僕だけを、私の使用人の中から連れて行くことになるだろう（坂田 1953 2: 308-09）。

中国人家僕は使い勝手はいいが、大事な場面には出せないという確信をハリスは持っていた。料理人を含む中国人家僕を皆下田に残して江戸へ向かうハリスは、道中の食事をどうしていたのだろう。この問題は日本人料理人を起用することによって解決された。

[1857年11月28日、川崎] 私の料理人は私に、ひじょうに美味しい小鴨とうまい鶉を私の夕食に供してくれた。私はこの男に、私が下田を出発する前の5週間ばかりの間、西洋式の料理をおしえていた。彼の料理はデルモニコの料理には劣るが、日本料理よりは私の味覚に大いにましである（坂田 1953 3: 28）。

5週間の特訓しか受けていない日本人料理人が、ハリスを満足させるほどの食事を提供できたのは本人の努力のたまものには違いない。ところで彼に西洋料理の手解きをした人物は一体誰だったのであろう。確証はないが、ハリスに仕えていた中国人料理人が真っ先に思いつく。

このように下田時代のハリスは生活面で中国人家僕に頼りきっていた。しかし主人と従僕の関係は決して円滑だったとは言えない。強制送還された裁縫師は例外的な厄介者であったかも知れないが、アヘンの一件でも分かるように中国人家僕はハリスの保護のもとでかなりの自主性を持って——ハリスから見れば身勝手に——行動していた。

6. 西洋人に雇われる中国人

ペリーとハリスが中国人を日本へ随行させたことは偶然ではない。彼らにそうさせる歴史背景があった。19世紀南中国沿岸部にやってきた西洋人の多くは仕事の助手から家事一切までその担い手として中国人を雇っていた。商売のことなら買弁と呼ばれる番頭に任し、家事一般ならボーイ(boy)あるいはステュワード(steward)と呼ばれる執事に一任するのが一般だった。料理、給仕、洗濯、掃除、雑用など生活面すべてを中国人に任せていた。ペリーは、マカオ・広東在留中この常況を目の当たりにしている。

中国に居留するヨーロッパ人とアメリカ人の家族に雇われている中国人の使用人の大部分は、食事は自分持ちである。その賃金は1ヶ月4ドルから6、7ドルまでいろいろある。料理人は7ドルから10ドルをもらっている。外国人家庭の日用消費物品はすべて買弁と呼

ばれる代理人を介して手に入れる。この買弁が使用人を雇い、彼らに賃金を支払い、保証人になってくれる。買弁は家計費を定期的に記帳し、決められた時期ごとに雇用主と決済をする（オフィス宮崎 2009 2: 45-46）。

特に中国人裁縫師は重宝されていたようである。

これら男のドレスメーカーは、中国に居留している人々から非常に重宝がられ、中国を立ち去るときに連れていったヨーロッパやアメリカの夫人もいるほどである（オフィス宮崎 2009 2: 49）。

ペリーは中国人が各種のサービスを提供できることを評価する一方で、他方人としては信用できないという当時の西洋人が一般に持っていた認識も持ち合わせていた。

提督は中国の下層・労働階級を雇う必要から彼らと接触し、いくつかの判断を下す機会があったが、予測と違って実際にはそれほど悪い人間ではないことを知って満足した。確かに正直は中国人の伝統的道德である。しかし、この商人根性の国民の間ではなんでもそうであるように、正直も金で買うことができるのだ。中国の労働者が報酬とひきかえに正直であることを約束すれば、たいいてい場合は仕事を依頼しても良い。とくに彼らが契約を履行すると保障したときは。しかし、契約の一部に正直という項目が明記されていなければ、中国人は機会があれば気の向くままに嘘をつき、欺き、盗む権利を持っているものと考えられる。使用人を雇うときは、その人物の正直と善行に責任を持つ保証人をつけさせるのが慣習となっている。[中略] 外国商人は保証人のない中国人の召使を家に入れようとは思わない（オフィス宮崎 2009 2: 53-54）。

中国人は一般にいわれているほど卑劣な人間ではないけれども、彼らにきちんと仕事させるためには報酬はもちろん契約書と保証人という信頼を約

束できる条件を揃える必要があると考えていたようだ。

ハリスも下田で自分に仕えていた中国人を信用していなかった。彼と中国人召使との緊張関係を端的に表すエピソードがある。1857年の末、ハリスは江戸参上を目前にして自分の留守中、下田の役人に中国人召使の監視を書面で依頼している。もし逃走する者がいれば身柄を拘束してくれとの指示まで残している（Harris 1959: 409, 注 489）。

信用のおけない、いつ逃走するかわからない中国人を、雇わざるをえなかったもう1つの歴史背景がある。それは日本の鎖国である。長崎に来る中国人とオランダ人以外の外国人の来航は海難の理由以外すべて拒絶するという国防体制は、幕府の祖法として19世紀半ばまで日本を覆っていた。ペリーが日本に来る前に、すでにイギリス、ロシア、アメリカなどが幕府と通商交渉を試みたが、ことごとく失敗に終わっている（西川 2016: 4-15）。予告なしで江戸湾の入り口まで侵入するペリー艦隊が、現地で都合良く日本人を雇い入れ業務に充てられようとは想定していなかったはずだ。ハリスは、ペリー条約によって日本の役人を通して生活上の支援をある程度得られることは期待できても、彼らに必要な知識と技術を持つ現地日本人の使用人がうまく見つかるとは限らない（山本 2017: 13-71, 79-114）。ハリスが納得する料理を出すコック、彼の着る洋服を作るテーラー、洋服を上手に洗濯してアイロンをあてる洗濯人、そして家僕たちを取り締まるボーイが下田で調達できるという保証はない。こういった状況でペリーもハリスも、渡航前に必要な人員補充をしておかなければならないという認識を持っていた。日本の情勢とは違って、中国沿岸部に点在する西洋勢力の拠点では西洋人が必要とする熟練および非熟練労働力の市場が確立していた。この意味で、ペリーとハリスが中国人を日本へ連れていったことは歴史的に必然性があったと言える。

国際情勢から見ても南中国沿海部はアメリカの日本進出にとって格好の飛び石となる条件が揃っていた。19世紀半ば西洋諸国はすでにここで植民地と開港場を獲得していた。「中国は西洋世

界の側に属し、日本のみが、もとの世界のままに存続していた」というのが当時の東アジア情勢だった(園田 1993:20)。マカオは16世紀末からポルトガル領になり、広東は18世紀から西洋貿易の拠点となり、19世紀半ばになると香港はイギリス領になり、上海は国際自由貿易港となった。アメリカは1835年に東インド艦隊を設立して、南中国を中心に東アジアと東南アジアでのアメリカの権益を守り、更にアヘン戦争後の1844年に望厦条約(Treaty of Wanghia)によって中国での新しい貿易の利権を確保した。このようにマカオ、広東、香港の三角地域はアメリカの東インド艦隊の活動の拠点となり、ペリーとハリスに労働力を確保しやすい環境を作っていたのである(Schroeder 1985)。ここでは中国人の労働市場ができあがっており、雇用関係を保証する契約・保証人システムも確立されている。その上、現地の中国人は2、300年にわたる西洋人との関わりの経験から、西洋人の仕事上と生活上のニーズに応える技術をすべて身につけていたのである。

19世紀中頃の南中国にはびこる西洋勢力圏はアメリカの日本進出にとって前線基地の役割を果たしていた。ペリーとハリスは、ここで物的および人的資源を補給するほか、地域事情と世界情勢に関する情報も丹念に収集していた。このような経緯をへて、中国人はアメリカ人に付随して開国の夜明けの日本にやってきたのである。

7. 結 論

ドナルド・ロビンソン(Donald Robinson)が近代西洋帝国の拡張を理解するには進出・侵略の対象国家、社会、民族の指導者層の協力を無視できないという主旨の論文を1972年に発表して以来、帝国主義の現地人協力者(indigenous collaborator)に関する研究が盛んになった。ロビンソン論文が注目したのは指導者層に属する現地協力者だったが、彼の見解に啓発された研究者は商人、仲介人、スパイ、書記、ガイド、飛脚など多岐にわたる現地人協力者にまで対象を拡げていった(Atmore 1984, Bayly 1996, Onley 2004)¹²⁾。この

流れも汲んで、ヘンリー・レイノルズ(Henry Reynolds)は1996年に*With the White People*(白人と共に)と題する本を出版して、オーストラリア史研究者の間で波紋を呼んだ。レイノルズは従来の「白人対現地人」=「侵略対抵抗」の歴史叙述の枠組みを破り、西洋人のオーストラリア入植・侵略はアボリジニーから多方面で協力を得ながら進行していったと論じた。アボリジニーは西洋人の内地案内役を務め、探偵や警官として西洋人の勢力圏拡大にも加担し、またカウボーイとして西洋人の牧場経営も手伝っていたという。このように近代帝国主義・植民地主義の最前線では、白人の脇には必ず現地人協力者が活躍していたのである。

では日本にやってきたペリーとハリスの現地人協力者は何者だったのか? 彼らは日本人ではなく、隣国の中国人であった。長年に及ぶ鎖国の結果、ペリーとハリスに協力する日本人はいなかった。確かに、アメリカ人に助けられた日本人漂流民はいたし、中には音吉、万次郎、彦蔵ら何人かは英語を覚え西洋人の協力者になった者もいたが、ペリーとハリスの日本開国プロジェクトに限っていえば、彼らの関与度は極めて低い。幕末の政治情勢は日本人が西洋人のために働くことを許さなかった。結局アメリカ人のために通訳、給仕、雑用などの役を果たしたのは中国人越境者である。これとまったく同じ現象は世界中におけるイギリス植民地で見られる。アフリカ、インド、中国、東南アジア、オーストラリア、北米、中南米の白人移民社会では必ずインド人、ユダヤ人、中国人などの非白人越境者が協力者として活躍していた(Markois 2017, Onley 2004, Plüss 2011)。

最後に2点、再確認しておきたい。まず日本の開国はアメリカ、ロシア、イギリスなどの西洋諸国の外交工作の成果であることは間違いない。だが脇役として西洋勢力を補助した中国人の存在も忘れてはならない。もう1つ、西洋帝国主義がもたらした日本開国は、日本を近代中国人の海外移民先の1つにしたのである。19世紀以来、大量の中国人が移入する東南アジアと北米中南米にあ

12) Bonacich (1973) は社会学の観点から同じ現象を論じた。

る西洋の植民地に加え、日本にできた外国人居留地にも中国人越境民が西洋人の袂にすがってやってくるようになった。まさに文字通り「with the white people」である。言い換えれば近代日本の原点は西洋との再遭遇のみならず、中国人との再遭遇にも端を発していると言えよう¹³⁾。

引用文献

- 伊豆下田観光協会 2018 「黒船祭」<http://www.shimodacity.info/event/kurofuno.html>. 1月23日アクセス.
- 宇田川武久 2015 「ふたたび鉄砲伝来論：村井章介氏の批判に答える」『国立歴史民俗博物館研究報告』190：1-24.
- オフィス宮崎編訳 2009 『ペリー艦隊日本遠征記』2冊. 万来舎.
- 加藤祐三 1985 『黒船前後の世界』岩波書店.
- 後藤敦史 2017 『忘れられた黒船：アメリカ北太平洋戦略と日本開国』講談社.
- 金井 圓訳 1985 『ペリー日本遠征記』雄松堂.
- 佐伯千鶴 2014 『ペリーと黒船祭』春風社.
- 坂田精一訳 1953 『ハリス日本滞在記』3冊. 岩波文庫.
- 駿河湾 NAVI 2018 「ペリー来航記念碑」<https://www.surugawan.net/guide/27.html>, 1月23日アクセス.
- 園田英弘 1993 『西洋化の構造：黒船・武士・国家』思文閣.
- 程 永超 2012 羅森の目に映った「鎖国」と「開国」『アジアの歴史と文化』16：131-142.
- 中島楽章 2005 「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域貿易」『史淵』142：33-72.
- 鳴海雅哉 2009 「羅森の扇面詩について：史料紹介」『札幌国語研究』14：13-23.
- 西川武臣 2016 『ペリー来航』中公新書.
- 洞 富雄訳 1970 『ペリー日本遠征随記』雄松堂書店.
- 村上文機 1933 『開国史跡玉泉寺今昔物語』玉泉寺.
- 山本有造 2017 『カロライン・フート号が来た！ペリーとハリスのはざままで』風媒社.
- 羅 香林 1971 「香港開埠初期文教工作者羅向喬事蹟述釋」美國聖若望大學亞洲研究中心編『包遵彭先生紀念論文集』289-294. 台北：國立中央圖書館.
- 羅 森 2008 「日本日記」『甲午以前日本遊記五種』長沙：岳麓書社.

- A Native of China. 1856. Journal of the Second Visit of Commodore Perry to Japan by a Native of China. In Hawkes, Francis L. ed., *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan Performed in the Years 1852, 1853, and 1854*, 2: 395-406. Washington: Senate Printer.
- Atmore, A. E. 1984. The Extra-European Foundations of British Imperialism: Towards a Reassessment." In C. Eldridge ed., *British Imperialism in the Nineteenth Century*. London: Macmillan.
- Bonacich, Edna. 1973. A Theory of Middleman Minorities. *American Sociological Review* 38(Oct): 583-594.
- Bayly, C. A. 1996. *Empire and Information: Intelligence Gathering and Social Communication in India, 1780-1870*. Cambridge: Cambridge University Press.
- City of Newport. 2018. City of Newport, RI. <http://www.cityofnewport.com>, accessed Feb 9.
- Harris, Townsend. 1959. *The Complete Journal of Townsend Harris, First American Consul and Minister to Japan*. Tokyo: Charles and Tuttle.
- Hawks, Francis L. 1856. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan Performed in the Years 1852, 1853, and 1854*. 2 Vols. Washington: Senate Printer.
- Library of Congress. 2019. The Harris Treaty. <https://www.loc.gov/item/today-in-history/july-29/>, accessed Aug 6.
- Naval Station Newport. 2018. Naval Station Newport. https://www.cnrc.navy.mil/regions/cnrma/installations/ns_newport.html, accessed Jan 23.
- Newport. 2017. Newport Black Ships Festival. <https://www.blackshipsfestival.com/>, accessed Dec 23.
- Onley, James. 2004. Britain's Native Agents in Arabia and Persia in the Nineteen Century. *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 24(1): 129-137.
- Markois, Claude. 2000. Indian Communities in China, c.1842-1949. In Bickers, Robert A. and Henriot, Christian eds. *New Frontiers: Imperialism's New Communities in East Asia, 1842-1953*. Manchester: Manchester University Press.
- Plüss, Caronline. 2011. Baghdadi Jews in Hong Kong: Converting Cultural, Social and Economic Capital among Three Transregional Networks. *Global Networks* 11(1): 82-96.

13) 16世紀ポルトガル人の日本来航にも中国人が介在していた(宇田川2015、中島2005)。地政学の見地から日本と西洋の関係に中国が何らかの形で関わってくることは不可避なことかも知れない。

- Preble, George Henry. 1962. *The Opening of Japan : A Diary of Discovery in the Far East, 1853-1856*. Norman : University of Oklahoma Press.
- Rabson, Steve. 2016. Perry's Black Ships in Japan and Ryukyu : The Whitewash of History. *Asia Pacific Journal Japan Focus* v.14, issue 16, no.9.
- Reynolds, Henry. 1990. *With the White People*. Ringwood, Vic., Australia : Penguin.
- Robinson, Ronald. 1972. Non-European Foundation of European Imperialism : Sketch for a Theory of Collaboration. In Owen, Roger and Sutcliffe, Robert B. eds. *Studies in the Theory of Imperialism*, pp.117-142. London : Longman.
- Schroeder, John H. 1985. *Shaping a Maritime Empire : The Commercial and Diplomatic Role of the American Navy, 1829-1861*. Westport : Greenwood.
- Tao, Demin. 2005. Negotiating Language in the Opening of Japan : Luo Sen's Journal of Perry's 1854 Expedition. *Japan Review* 17 : 97-119.
- TOP Museum. 2018. The Dawn of Japanese Photography, Mar 8-May 8, 2011. <https://topmuseum.jp/e/contents/exhibition/index-345.html>, accessed Jan 6.
- Williams, Wells W. 1889. *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL. D. : Missionary, Diplomatist, Sinologue*. Edited by F. W. Williams. New York & London : G. P. Putnam's Sons.
- Williams Wells W. 1910. *A Journal of the Perry Expedition to Japan (1853-1854) by S. Wells Williams, First Interpreter of the Expedition*. Edited by F. W. Williams. Yokohama : Kelly and Walsh.